

---

# 空追（そらおい）

王蟲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空追そらおい

### 【Nコード】

N4767Q

### 【作者名】

王蠱

### 【あらすじ】

旅の蟲師 ギンコと相部屋になった一人の青年。

人形を操る不思議な術を使う彼は言った。

「女の子を探しているんだ」と・・・

(前書き)

説明不足が多分にありますので  
アニメ「AIR」を見ていただいてから  
読んでいただければ幸いです。

西の空からうつすらと闇が迫りつつある夕刻。宿場町に辿りついたその男は早めに

宿をとることにした。年不相応に黒みを失った髪は白というよりむしろ銀色に近く、

前髪は左目を覆っている。名をギンコというこの男、蟲師を生業とする旅の者であった。つい先日（前）に山奥のとある村での仕事を一段落させたその足で依頼のあった別の土地へと

向かうことになった彼だったが、なにぶんもうしばらくは山道が続く。

幸い先の仕事の報酬で路銀にはまだ余裕があることもあり、今日はこの辺りで

宿をとることにしたらしい。彼は珍しく疲れたような足取りで一件の宿の

暖簾のれんをくぐった。

「あのお、お客様・・・」

「?どうかしましたか?」

部屋に通されてしばらくした頃、部屋のふすまを開け入ってきたのは先ほどギンコを

案内してきたこの宿の女将おかみだった。なぜか申し訳なげな表情でこちらを見る

彼女は少し困ったような表情を見せ

「大変申し訳ないのですが、今から相部屋にさせていただけいても構いませんでしょうか?」

言いづらそうに告げた。しかし旅慣れてこういうことも日常茶飯事なギンコの方は

特に気分を害した様子もなく

「別に構いませんよ。相手方がいってんなら二人でも三人でもど  
うぞ」  
その言葉に肩の荷が下りたのか、女将は一礼するとそのままそそく  
さと戻っていく。  
数分後、女将に連れられやってきたその男は鋭い目つきをしながら  
もどこか優しげな  
雰囲気を醸す、少し不思議な感じのする青年だった。

「いや、本当に助かった。一時は野宿も覚悟してたんだが」  
「いいからもう頭上げろつて。そんな大したことした訳じゃねえん  
だし」

律儀に礼を言つて来る男を促し顔を上げさせる。歳はギンコと同じ  
か、いくらか  
下と行ったところか。旅装の汚れ具合や細かい拳動から相当旅慣れ  
ている人物だと  
いうことが窺い知れる。そんな彼はせめてもの礼に、と言って部屋  
の隅に  
置いておいた荷物をあさる。何をしているのか訝しがるギンコの前  
にポン、と  
置かれたのは一体の小さな人形。手の平に収まるほどの大きさのそ  
れは

精巧な芸術品という感じではなく、むしろ小さな子供の遊び道具の  
ような印象の代物だ。目立つ傷や汚れなどはないがどこか長い時間  
を経てきた雰囲気を放つそれに

男は右手をかざし

「よつと」

一声、人形がピクリと動いたのをギンコは見逃さなかった。満足げ  
な表情を見せた男が

そのまま指を動かすと人形が立ちあがる。啞然と感心が半分ずつ、  
というような表情の

ギンコの目の前でそれは歩き、跳ね、回り、そして踊った。この間、男はいっさい人形に触れていない。旅慣れ、そして無数の不可思議に出会ってきたギンコはこの現象が夢でも幻でもないことをとつくに理解していた。

「いやはや、すげえもん見せてもらったぜ」

芸が一通り済んだところでパチパチと拍手するギンコに男は照れ臭そうな表情を返す。

「ははっ、なにただの大道芸さ」

「いや大したもんさ。俺も長いこといろんな所巡ってきたが、こんなのは初めてだ」

かけられた賞賛の言葉に男は苦笑する。

「いやなに、お袋もバアさんもこれを生業にしてたからな。自然と身に付いただけさね」

「三代もこの芸を？」

男の言葉に微かに奇妙な感じを受けるギンコ。男の技は怪異の専門家であるギンコから

見ても確かに妙技というべきものではあったが、それだけで何世代も生活していると

なると違和感のようなものを感じてくる。その考え込むようなギンコの表情に気付いた

男は恥ずかしそうに顔を俯け頭をかく。

「・・・女の子を、な」

「へっ？」

「女の子を探してるんだよ、俺たちは。ずっとずっと、何百年も昔の話さ」

そこまで言つて男は語り出す。

祖母から母へ、そして彼へと受け継がれてきた約束。翼人と呼ばれた少女の物語を。

灯りを消し、布団に入る。ギンコは隣に眠る男の話について考えていた。

気の遠くなるような昔、一人の少女と男の祖先たちの旅。それはそのまま

男の旅の理由にもなっている。分からないではない、だが。

「なあ、お前自身はどう思ってたんだ？」

「・・・どつって」

ギンコの言葉に返事が返ってくる。やはり眠っていなかったらしい。

「あの話・・・、いや、お前さんが旅をすることについて、かな」

「・・・」

「話は分かった。お前さんの一族がその娘を本当に助けたいと思ってることもな」

「・・・」

男はなおも無言。それでもギンコは自分の考えをぶつける。

「だが、お前はお前なんだ。見ず知らずの娘を救うために自分の人生を

全て棒に振るかもしれない。それでもお前はまだ旅を続けるのか？」  
自分の言葉がキツくなっていることにギンコは気付いていた。だがやめようとは思わない。ギンコが旅をしているのは蟲を呼んでしま  
うその体質の為だ。

生命そのものに近い性質をもつ蟲は集まり過ぎれば災厄を呼ぶ。それを避けるため、

ギンコは旅を続けるしかないのだ。同時に彼は知り合いのとある少女のことも

思い出していた。先祖が封じた蟲をその身に宿した彼女は歩くことすらままならず、

今もいつ終わるとも分からぬ蟲封じを続けている。

旅という生き方を選ぶしかないギンコ。籠こもるという生き方しかでき

ない少女。

それはどうしようもない宿命じみたものなのかもしれない。しかし、目の前にいる男は

違う。彼を縛っているのは約束だ。それも永遠にも似た遠い昔の。それを守る必要が

果たしてあるのか、苦しくはないのか。それをギンコは聞きたかった。

「・・・勘違いしちゃいけねえよ、あんた」

ようやく返ってきた男の声は、しかし驚くほど穏やかだった。

「俺はな、別に見ず知らずの・・・つてのはちよつと不義理かもしねえが、

先祖の約束なんてこれっぽっちも大切だとは思ってねえ。

『代々やってきたから俺もやる』なんて強迫観念で動いてる気もない」

お袋やバアさんが聞いたら泣くか怒鳴るかするかもな、と笑っているような気配で

男は言う。ギンコはそれをただ聞いている。

「ただ、よ・・・」

「『ただ』？」

「・・・泣いてる女の子を見捨てるなんて、男としてやっちゃいかんだろ、やっぱり」

ニヒヒ、と続いた軽薄な笑い声は照れ隠しか。ギンコはこの男は馬鹿だと思った。

本当に、馬鹿が着くほどのお人好しだ、と。

「一晩だけとはいえ世話になった。いろいろ面白い話が聞けて楽しかったよ」



「そりやお互い様だ」

翌朝。揃って宿を出た二人はしばらく街道を並んで歩いていたが遂に別れることになった。二股になった分かれ道。ギンコは左へ、男は右へと歩を進める。

「あつ、ちよつと待ってくれ」

ギンコは自分の荷物をあさって何かを取り出す。ガラス瓶の中に収められた

それは降り注ぐ太陽の光を受け朱<sup>あか</sup>っぽい輝きを放っている。

「琥珀<sup>こはく</sup>だよ。前の仕事の報酬でいくらか貰ったもんさ。

くれた爺さんが言うにゃ、旅のお守りみたいなもんらしい」

それを男の手に握らせるギンコ。いいのかよ、という風な目で見てくる男に

「気にすんなよ、いいもん見せてもらった礼さ。じゃあな」

言ってギンコは自分の向かう方向へとさっさと歩いて行く。男はその後ろ姿をしばらく

見送っていたが、やがて自分も行くべき方向へと足を踏み出す。

目の前には長い長いあぜ道、その向こうに広がるのは澄み渡った空。

「また逢えたら今度は一緒に旅でもしようぜ。その女の子と俺の連れ、四人で一緒に、さ」

そんな声が背後から吹く風に乗って聞こえてきたような気がした。

(後書き)

「AIR」を見てから何かこの作品に関わる創作をしてみたいとずっと思っていました。

話としては1000年前と現代、二つの物語の間の時代にあったかもしれない話、

という設定で書いています。

「蟲師」を組み合わせたのは単純に作品が好きなのと  
雰囲気が出かかも・・・というような

半分以上直観によるものです。

感想などありましたらお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4767q/>

---

空追（そらおい）

2011年10月8日03時19分発行